
思い出ぶらり巫女

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出ぶらり巫女

【Zコード】

Z01560

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

布教活動？そんな事に早苗さんは労力など使つてはいられない！！！
今日も早苗さんは、まだ見ぬ巨大ロボットを探しにゆく！！

(前書き)

前書き

この話は、健気に巨大ロボットを探す早苗さんを何となく描いた話です。

結構ネタ話ですので、まあまあ見てください。

シチュエーション設定

巨大ロボットを探したけど正体が非想天測だったのが納得いかず、また大きな影？を頼りに探そうと思った。で、とりあえず守矢神社にて。

早「違う・・・私が見たのはもつとアクティブで謎めいていた・・・あいつとの幻想郷に真の巨大ロボットはあるはずです！」

どこかの政治家の演説張りに熱心に語る早苗に、文はインタビューすらしようとはせず話を聞いていた。

文「そういう話は興味深いんですけど、真実味が無い物を探すほど私は暇ではありませんよ？」

と常識的な意見を述べたが、早苗はあくまで我を通してくる。

早「別にあなたに探しでもらおうとは思っていません！！私がこの田で見つけてみせます！！」

文「それはいいんですけど、あなたは守矢の巫女でしょう？そんな事に時間を使うより、もう少し布教等に努めたりしてはどうですか？」

？

早「いいえ！！これはそれ以上に大事な事です！！なんて言つたつて巨大ロボットですよ！？外の世界ではありえないかもしませんが、幻想郷なら十分あります！！では、私は早速探してきます！」

と語つと、文が止める間もなく早苗は神社から飛び去ってしまった。

文「ちよつと早苗を・・・つてもう手遅れですね。まあもしかしたら面白そうなネタを提供してくれるかも知れませんね。待つのも方便でしょう。」

と語つて二ふと、文の後ろから神奈子が話しかけてきた。

ハ「何の話をしているんだ？ 鴉天狗よ。」

文「あやや、いつの間にいたのですか？」

洩「ちよつと前だよ。」

と神奈子の後ろからぴょいと姿を見せた。

文「諏訪子様までいたのですね。」

ハ「それはさておき、また早苗がいないのだが・・・何か知らないか？」

文は正直に言おうか悩んだが、あえて黙つておいた方が面白くなると判断したようだ。

文「えーっと・・・私にはさっぱりですね。」

ハ「そうか。最近外に出る事が増えたな・・・悪い虫がついていなければいいが・・・」

諭「大丈夫だよ。早苗は賢く育ってきたし、それに、仮にも神様だよ？余計な心配なんていらないって。」

ハ「・・・それもそうだな。」

諭「今は見守る事が大事だよ。タブン…」

しばらくして、早苗は魔法の森と思われる所を、ひたすらに歩き回っていた。

空から飛んでいたのでは見つかないと踏んだ早苗は、地道に歩いていればと判断したようだ。

早「はあ・・・はあ・・・以前この当たりでの影を見たはずですけど・・・」う森が茂つていては困りますね・・・かといって空から見ていては曖昧なままですし・・・

とぶつぶつ歩いていると、早苗の視界に何か大きな物が映ったようである。

早「あ！…あの影はもしかして…・・・」こはもう行くしかありません！」

一方、巨大な影の近くにいるアリスは、上海の巨大化実験にいそしんでいた。。

ア「ううん・・・巨大化は出来ても長期継続はまだ厳しいわね。もう少し魔力供給のバランスを・・・」

早「「」だあーーーーで確かにあの影を見ましたよーーーー！」

ア「ん？誰よ？また魔理沙？さつき来たばっかりでしょーう？今実験中だから邪魔しないでよ。」

早「実験中？もしや巨大ロボットの黒幕はあなただったのですか！？」

ア「巨大ロボット？何言つてるのよ。私は人形の巨大化の実験をしているのよ。残念だけどロボットなんて作つてないわ。」

そう、早苗が見た影というのは、紛れもなくゴリアテ人形だったのだ。

それがわかつた早苗は、体中の力が抜けていくようにひざまずいた。

早「作つて・・・ない？」

ア「そうよ。て言つたか誰かと思ったら守矢の方の巫女じやない。あなたはまだ眞面目な子だと思ってたんだけど、そんな物に興味があつたのね。」

早「そんな・・・これが最後のチャンスだと・・・思つ・・・」

そつ言つたのを最後に、早苗はその場に力尽き、倒れてしまった。

ア「あら？倒れちゃつたわね。相当疲れてたのかしら・・・さすがにこのままはずいわよね。」

早「……ん?」
「？」

早苗が目を覚ますと、そこは見慣れない部屋のベッドであった。
傍には、アリスが看病をしていた様子で椅子に座っていた。

ア「目を覚ましたようね。」

早「あなたは……確かアリスさんでしたよね?」

ア「随分歯切れが悪いわね。仮にも恩人よ?」

早「す、すいません。まだ幻想郷の人達の事をちゃんと覚えていないので……」

ア「……まあいいわ。で、あなたはさつき倒れたからとりあえず私の家のベッドに寝てもらってるんだけど……相當疲れてたの?」

早「疲れていたと言いますか……どちらかと言えばショックですね……これは確実に見つけたと思っていた物が違っていたショックで……今までの疲れがどつと出てきたんだと思います……」

ア「なるほどね。よほど巨大ロボットが見たかったの?でも巨大ロボットなら以前なかつたかしら?確か人里の麓の……」

早「あれは違います!!あれはただでたらめに動いている大きな何かですよ!!あんな物のどこが巨大ロボットなんですか!??」

ア「・・・随分な剣幕ね。ちょっとびっくりしたわ。」

早「あ・・・すいません・・・ついかつとなってしまって・・・」

ア「別にいいわよ。よくわからないけどこだわりがあるみたいね、巨大ロボットに対して。で、どうしてそこまでして巨大ロボットを探しているの?」

早「それは・・・外にいた頃、テレビでふらつと見た時の・・・あの巨大ロボットのイメージが、今でも頭の中に鮮明に残つてしまつて・・・そして最近の騒ぎからですね、私が巨大ロボットを探そうと思ったのは・・・今こうして冷静に考えてみたらおかしな話ですね、幻想郷に巨大ロボットがいたとしても、それはにとりさんが作った物だと、もしくは諭訪子様が作った物だと、それぐらいしか答えはないはずなのに・・・私は一体、何を探していたのでしようね・・・」

ア「・・・それは多分、思い出よ。」

早「思い出?」

ア「巨大ロボットがいるんだって思う今のあなたと、巨大ロボットに憧れた小さい頃のあなたがふつと重なつて、今みたいに必死に探そうとしたのよ。それこそ細かい事とか一切気にしないでね。あなたは恐らく、思い出の中で無我夢中になつてたのよ。」

早「・・・考えた事ありませんでした・・・そんな事・・・」

ア「これはむしろあなた自身が気づける事じゃないわね。第三者の目でしかわからない物よ。」

早「そうですか。」

ア「まあ、こんな事言つても合つてゐるとは限らないわね。あくまで私が見た限りで言つた意見だもの。」

早「それで十分ですよ。」

ア「そ、う。 とりあえづ、まだ巨大ロボットは探すのかしら？」

早「いいえ、もう探すのは止めておきます。でも、きっとあると私は信じますよ。」

ア「それが多分今のあなたの一番の答えね。」

早「私もそう思っています。」

ア「じゃあ、もう疲れとかはないわね？ 大丈夫？」

早「はい、お陰様ですっかり元気になりました。ありがとうございます。」

ア「感謝なんていらないわよ。それより、今やっている巨大化の実験でも見るかしら？」

早「はい！ 是非お願いしますー！」

その後、早苗はアリスが今やっている巨大化の魔法の実演を見た後、

まっすぐに神社へと帰つていった。

その頃には日も落ちかけていたので、神奈子と諏訪子の一人が帰つてきた早苗を少し心配していたが、その心配もすぐになくなつた。今まで早苗にあつた憑き物のような物が落ちていたからだ。

恐らく早苗は自身の思い出をふしきつたからであろう。

そしてそれからの彼女はあの靈夢に劣らぬ活躍を見せていくのであるが、それはまた別の話だといいね。

人として、現人神として、今日も彼女は奇跡を起こしていくのであつた。

ぶらり巫女 一応FIN

(後書き)

後書き

こんぱり（#^—^#）澄田ですよ～（^—^）

早苗さんはやつぱり健気じやないといけませんよね？わしはそういうんですよ。

中身的にはくだらないと思いますけど、わしはこんなノリが好きな
んです（^—^）

所詮自己満足の駄文ですので、見てくれたあなたには本当感謝です
m(_____)m

スペシャルサンクス

東風谷 早苗 様

射命丸 文 様

八坂 神奈子 様

守矢 謙訪子 様

アリス・マーガトロイド 様

では、このような粗末な物をお読みいただき、ありがとうございます

した

(#^—^#)

b y 澄田 康美

PS、早苗さんってある意味不思議っ子ですよね？後他の短編もよ
ろびい（^—^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156o/>

思い出ぶらり巫女

2010年10月28日04時10分発行